

仲盛 健治 Kenji Nakamori

札幌医科大学口腔外科

札幌医科大学口腔外科の仲盛博士は、舌扁平上皮ガン(SCC)のリンパ節への転移予測について研究されています。これまでに、口腔扁平上皮ガンの転移が、各種病理組織学所見や、 β -あるいは γ -カテニンの免疫組織学的所見から予測ができることを示してきました。



博士は長年、臨床所見からの転移予測可能性について研究してきました。2008年、このテーマについての所見をまとめて2つの有力なジャーナルに投稿しましたが、どちらもリジェクトされてしまいました。研究内容には自信がりましたが、査読者のコメントは、新知見が何もない(Oral Oncology)、客観性がなく循環論法に陥っている(Head and Neck)、と厳しいものでした。博士は、投稿した論文には自分のアイデアが十分に反映されていないと考え、DMCの論文レスキューサービスに原稿のオーバーホールを依頼することにしました。

研究対象

舌の扁平上皮ガン(SCCOT)では、ガンの深さが局所的なリンパ節転移を推測するのに有力な手掛かりとなると考えられています。ガンの深さは、外科的に切除された組織片から組織学的方法で測定されます。しかし、生検組織による測定では誤差が生じやすいという欠点があります。博士は、切除によらない臨床的な所見、つまり視診や触診だけで転移が推測できるかどうかを確かめました。30年間集めた280の症例をまとめたデータによると、あるタイプの癌では、浸潤の深さは

Kenji Nakamori DDS, PhD

Sapporo Medical University,
Department of Oral Surgery

Research interests:

- Squamous cell carcinoma (SCC) of the tongue
- Regional lymph node metastasis
- Clinical, histological and immunopathological prediction of metastasis

博士は、研究内容に自信を持っていましたので、リジェクトに納得できませんでした。自分のアイデアが投稿原稿には十分に反映されていないと考えました。

仲盛 健治 Kenji Nakamori

札幌医科大学口腔外科

長軸方向の大きさと相関し、転移が推測できる可能性を示していました。

問題点

データの一貫性 1976年～2005年という長期にわたる症例データなので、評価方法に一貫性があることを示す必要がありました。期間中、医局スタッフの異動もありました。ある症例では臨床所見の記録と写真が、別の症例では臨床所見の記録だけが使われました。査読者の一人は次のようにコメントしてきました。「期間中、すべての検査員が同一の方法で検査したという保証があるのだろうか。厳密な基準により測定したデータでなければ、修正不能な不備があると思われる。」

"長期間にわたる症例記録の集積であるため、すべてを同一人物で評価したわけではありません。しかし、すべての研究対象期間で、少なくとも共著者の中の一人以上が在籍しており、ほぼ同一の基準で評価されているものと判断しました。それをうまく表現したいと考えました。"

データの意義とオリジナリティ DMCの見立てでは、データおよび知見の意義とオリジナリティの表現が十分ではありませんでした。当然、査読者もそれらを見落しました。査読者1は「データが示す知見の一部は既知である。深さや大きさについてもすでに報告されている。」とコメントしました。査読者2はもっと厳しく、「新知見が何もない。この論文は従来の知見を述べているに過ぎない。」とコメントしました。

「切除組織によらない深さの評価」、およびその臨床的意義を示すことがこの論文のpointと考えていました。」

書法のグローバルスタンダード 投稿された論文は、他社で英文校正を済ませてありましたが、文法的な誤りがあり、ネイティブの文章ではありませんでした。加えて、生物医学論文の標準的なスタイルに準拠していませんでした。恐らく、他社の英文校正担当者はネイティブではないか、あるいはサイエンスの書法に通じていないのでしょうか。

ネイティブでない人にとって、英語の細かいニュアンスまで適切に表現するのは困難と思われまます。しかし、この点こそが重要なのです。ネイティブがこなれていない英語を読んだ時には無意識的に違和感を感じます。査読者は、論文に言語上の問題があると、無意識的に、科学的内容にまで偏見を持ってしまうのです。

進め方

博士とDMCの論文レスキューチームは最初の数日間を、どのように原稿の改訂を進めたら良いかについて検討しました。

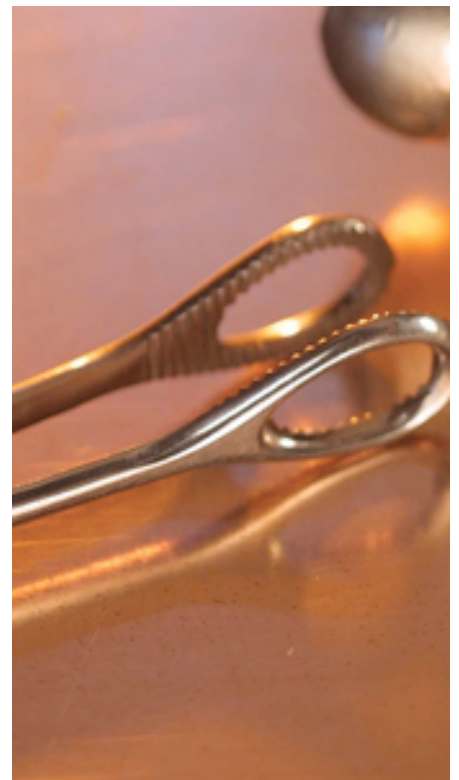
「細かなニュアンスを英語で伝えることは難しく、さらにテクニカルタームや専門的な知識など領域特有の細かな情報を共有する必要があったため、入念に事前の打ち合わせを行いました。

必要に応じて、教科書や他の文献のファイル、プレゼンテーション資料などをmailに添付して、より詳細に情報交換しました。」

解決への取り組み

データの一貫性 データ収集方法の項は完全に書き直し、新たな内容を文献とともに付加しました。肝心なことは、全体の例数に対する失われた例数の割合、各共著者の勤務年数、データの記録方法を明記した点です。

論文の内容ではなく、査読者コメントへの回答として、詳細な説明が必要でした。博士と論文レスキューチームは 回答の作成では やりとりを6回繰り返しました。最初は一つの文だった回答が、最終的に二つの段落になった場合もありました。最終的に、30年間使用した一貫性のある方法の詳細を述べました。両者が力



これは、初期口腔ガンで治療を困難にしている問題を扱った、卓越した論文である。著者らは、臨床的な特徴、組織学、転移を関連づける合理的な指標を用いている。

- 査読者2、コメント1
(Oral Surgery)

仲盛 健治 Kenji Nakamori

札幌医科大学口腔外科

を合わせ、論文だけでなくジャーナルやその査読者とのコミュニケーションのすべてにわたり、最善を尽くしました。

論文の意義とオリジナリティの向上 論文の意義とオリジナリティを強調するために、文章構造の多くを修正しました。Introductionでは、これまでの知見および問題点を述べ、博士が対象としている事柄について読者の興味を引くようにしました。Discussionでは、一番大切な冒頭の段落で、主要な知見とその臨床診断における意義を強調しました。その他、多くの場所で論文の意義とオリジナリティを強調しました。

「校正を重ねるにつれ、論点が明確かつわかりやすくなってきました。」

グローバルスタンダードに準拠したライティングスタイル 論旨が円滑に論理的に流れるように、以下の修正を加えました。

- 段落を再構成し、各段落にトピックセンテンスを追加した。
- 読み易くするため、各文章で主要部を文末に移動した。
- 論理の流れが明瞭になるように、文章間に although や howeverなどのコネクターを配置した。

「トピックセンテンスで各段落の主題が明瞭となり、全体の流れがより明確になりました。」

やりとりのくり返し DMCの論文レスキューチームは力を惜しみません。博士の原稿は再投稿するまでに7度書き直し、投稿後の査読者への回答は6度書き直しました。その間、博士とのメールのやりとりは40回にのぼりました。

「査読者のコメントに対し、より論理的、かつ説得力のある回答を作成するよう配慮しました。DMCとのやりとりでも、誤解がある場合には解消されるまで何度も繰り返しました。」

成果

論文のアクセプト 博士は改訂した論文を2008年9月、Oral Surgery に投稿しました。努力の甲斐があり、エディターの反応は大変好意的でした。査読者1は「小さな修正を加えればアクセプトして良い」とコメントしてきました。査読者2は「これは良く出来た論文であり……」とコメントしてきました。前に2度リジェクトされている論文が2008年12月に無事アクセプトされたのです。

査読者の態度の違い 二つのジャーナルからリジェクトされた時のコメントは軽いもので、修正提案もほとんどありませんでした。それとは対照的に、アクセプトされたジャーナルからは、良く検討され、真摯な敬意を込めたコメントが返ってきました。

「リジェクトの原因については、論点がジャーナルの求める内容に沿わなかったのか、あるいは、表現が不十分であったためか、実際のところは未だに解りません。しかし、DMCに相談することで解決できたように感じます。」

親密なやりとり、安心なセキュリティ DMCの論文レスキューサービスの特徴は、エディターの全員が、東京在住で、日本語もできるネイティブであり、しかも医学生物学の専門家であることです。お客様はメール、電話、あるいはface to face でエディターと直接、論文内容について細かいニュアンスまで日本語でやりとりできるのです。

「いつも日本語で細かいニュアンスまでディスカッションできました。他の会社では原稿が海外に送付されて校正されることもありますが、DMCでは最後まで国内で処理されるので安心です。」

低価格 この論文は、既に別の会社で2度も英文校正されていたため、著者の予算が限られていました。DMCではこのような状況を勘案し、フレキ



いつも日本語で細かいニュアンスまでディスカッションできました。他の会社では原稿が海外に送付されて校正されることもありますが、DMCでは最後まで国内で処理されるので安心です。

-仲盛博士

CASE STUDY: 論文レスキュー

仲盛 健治 Kenji Nakamori

札幌医科大学口腔外科

シンプルな料金システムを適用しました。その結果、予算範囲内で出版にこぎ着けることができました。

出版された論文はこちらから見ることができます: <http://www3.interscience.wiley.com/cgi-bin/fulltext/122295829/HTMLSTART>



DMCの論文レスキューチームは力を惜しみません。博士の原稿は再投稿するまでに7度書き直し、投稿後の査読者への回答は6度書き直しました。その間、博士とのメールのやりとりは40回にのぼりました。

DMCの論文レスキューは、リジェクトされた論文の原稿をアクセプトされるように書き直すという強力なサービスです。あなたの論文がレスキュー可能かどうか、無料で査定いたします。DMCに電話かメールでご連絡ください。詳細については www.dmed.co.jp/editing/paper_rescue/ をご参照ください。